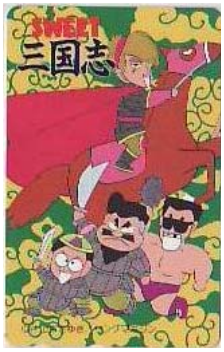
カードコレクション

＜　第 37 回　三国志編　＞　　健

三国志最大の見せ場の一つである赤壁の戦いを映画化したジョン・ウー監督の「レッド・クリフ part1」が昨年 11 月に公開され高い興行成績を残しつつ 1 月に上映を終了した。4 月には part 2 の公開が決まっていてその人気にあやかり三国志フェアを組んでいる書店も多い。

改めて眺めてみると史書、経営、小説、コミックなど刊行物の多さ、内容の多様性に驚く。三国志は広い大陸を舞台に武人・賢人・統率者が入れ替わり登場して覇を競う物語でありその魅力は登場人物の個性と権謀術数の世界だ。長い歴史が詰まったものだけに実社会で生きるための参考になる内容を含み故事成語も多く生まれている。そのためか歴史小説の

愛読者というと古くは年配の男性が殆どだったが「三国志」は活字離れしている若者の間でも人気のあるロングセラーだ。面白い現象だが主な理由としては三国志の入門編となるエポックメーキング的なものが 3 つあるからだ。1 つ目は横山光輝が 1971 年から 1986 年の 15 年をかけてコミック・トムに連載したコミック版「三国志」だ。登場人物が多く複雑な対人関係をわかりやすく描き持ち前のストーリー展開の良さでファンを増やした功労者といえる。



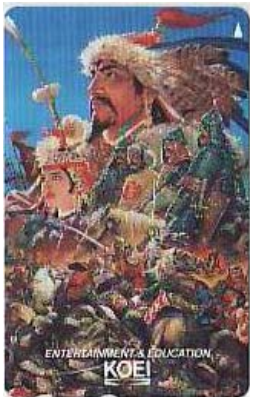
弱小雑誌ではあったが 100 頁近い破格の連載とあって毎号読み応えも十分だった。

2 つ目はＮＨＫの人形劇「三国志」だ。1982 年 10 月 2 日～1984 年 3 月 24 日に計 68 話放送された。川本喜八郎の精巧な人形はもとより、従来の衝立型の舞台から衝立を外し四方からの撮影をしたこと、兵士の行進など大量の人形をコンピューター制御したこと、赤壁の戦いでは実際にセットや人形を燃やしたなど話題を集めた。

３つ目はＫＯＥＩの歴史シミュレーションゲーム「三国志」のヒットだ。自らが三国志の世界に参加することにより史実への興味を深めのめりこんだ者は数多い。

業界もそれぞれ土壌が広がった分派生的に多数の作品が発表され従来の劉備・孔明を好意的に書いたものから脱却し新しい解釈・視点で書かれたものも多くなっている。コミックでは若き曹操を描いた異色作「蒼天航路」、ファンタジーながら三国志を取り入れた「群狼伝」などの人気が高い。小説では北方謙三「三国志」がハードボイルド風なのが異色。最近では宮城谷昌光が歴史の原点を洗い直すと表明して文芸春秋に連載している。昔の作品も文庫、アニメ、DVD 化されゲームもヴァージョンアップするなどしてその人気は定着している。

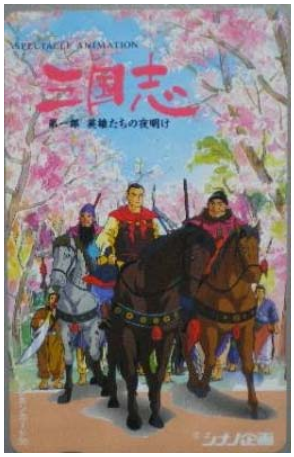
そういうわけで三国志が実写で見られるとあって「レッド・クリフ」は是非ともスクリーンで観たいと思っていた。最近は入替えを実施している映画館が多く好きな時間に入れないので行きそびれていたが意を決し、入替えの無い映画館まで足を伸ばして観に行ってきた。

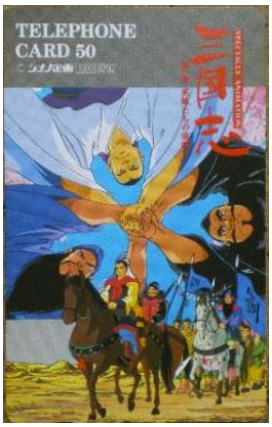


映画の感想を一言でいうなら見応えはあるが言いたいことは山ほどあるというのが正直なところだ。実写の場合リアリティが一番の問題になる。衣装・小道具などは結構凝っていて中国の歴史文化に触れるという点では申し分なくセット、ロケーションもスケールが大きく満足できるものだった。

見所は大量のエキストラを動員した合戦のシーンだ。騎馬戦、人と人のぶつかりあい、土煙があがるシーンなどＣＧにはない迫力があり、集団戦での武器・工夫などふんだんに見せ飽きさせない。血が飛び散る特撮が多い割に残虐な雰囲気にならないようにしているのは一般向けを考えてのものだろう。

一部子供だまし的な戦術、ビジュアル効果を狙った戦闘シーンはリアルではないがこれが演出というものだろう。



不満はまず登場人物だ。中村獅童の役は甘興という武将。三国志には出てこない人物だ。呉の名将「甘寧」の名が無いのだからこの役を振るのが普通と思うファンは多いはずだ。

本来、赤壁の戦いの前半は、魏の曹操に対し連合を目論む孔明と呉の周愉のからみが見もの。孔明の能力が周愉という天才を相手にさらに引き立つ形になっているが映画は周愉を中心に据えようとしているようだ。金城武の孔明は中々似合っているが part 1 ではほとんど見せ場がない。大役の劉備・曹操のカリスマ性が感じられないこと、関羽、張飛、趙雲たちの強さが表現しきれていないことなど登場人物それぞれに拘りを持つファンにとって言いたくなる部分は多い。また赤壁以前の経緯を知らずに観る人には細かく挿入されるエピソードの面白さが伝わらないのではという懸念も湧く。史実的におかしいのは「赤壁」だ。これは合戦のあった場所で用いられた火計により岩壁が真っ赤に燃え上がったことから合戦後に付いた名前だ。陣取りの時から赤壁という名前が使われているのはおかしい。ツッコミを入れたくなるところだが限られた時間内に収めるには相当の脚色も止むを得ない。只、三国志は前記したようにいろいろな視点で書かれた「三国志」があるので事実・虚構を含めそれぞれの「三国志」の違いを楽しむ土壌は出来ておりツッコミをいれるのもファンの楽しみというもの。実写版としては満足できるもの。いろいろ書いてはきたが part 1 は前哨戦が終わったところなのでクライマックスのある Part 2 にはおおいに期待している。